

うっしっしいー情報2017

12月市



豊岡農業改良普及センター

12月13日に行われましたセリ市全体の平均価格は、去勢が100万、雌が92万3千円でした。

普及センター調べ（税込価格）
（雄を除くため、JA公表数値とは異なります）

地域	去勢			雌			総計	
	頭数	DG	平均価格	頭数	DG	平均価格	頭数	平均価格
赤佐	9	0.862	904,920	2	0.833	862,920	11	897,284
篠山	6	0.980	1,029,780	3	0.791	819,000	9	959,520
丹波	21	0.976	1,031,914	20	0.840	887,544	41	961,490
朝来	4	0.981	1,001,970	7	0.820	885,600	11	927,916
播磨	16	0.960	990,225	17	0.851	833,824	33	909,655
美方郡	86	0.959	1,008,343	69	0.870	977,791	155	994,743
豊岡	24	0.979	1,030,635	25	0.853	922,709	49	975,571
養父	25	0.990	1,028,765	19	0.859	923,400	44	983,266
摂津・神戸	8	0.918	987,120	5	0.808	838,728	13	930,046
県北C	3	0.80	914,760	2	0.643	694,440	5	826,632
市場全体	202	0.960	1,008,207	169	0.852	922,902	371	969,348

12月市種雄牛ランキング

順位	種雄牛	去勢			雌			総計	
		頭数	平均DG	平均価格	頭数	平均DG	平均価格	頭数	平均価格
1	芳悠土井	55	0.979	1,024,861	43	0.881	948,893	98	991,528
2	丸宮土井	36	0.967	1,038,960	34	0.809	908,534	70	975,610
3	丸明波	5	0.959	950,616	10	0.870	987,012	15	974,880
	総計	202	0.960	1,008,207	169	0.852	922,902	371	969,348
4	芳山土井	31	0.961	990,639	26	0.888	942,632	57	968,741
5	照忠土井	36	0.951	1,002,150	36	0.842	914,250	72	958,200
6	千代藤土井	11	0.960	996,251	7	0.855	888,686	18	954,420

価格は税込み (10頭以上の出荷があった種雄牛のみ記載)

ランキング種雄牛の育種価

	種雄牛	枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	皮下脂肪厚	歩留	脂肪交雑
1	芳悠土井	A+	A	A	B	A	A+++
2	丸宮土井	B	B	A+	A++	A+	A++
3	丸明波	D	A++	D	A → A+	A++	A+
4	芳山土井	A+	A++	A++	C	A+	A+
5	照忠土井	B	A+++	A	A+	A+++	A+
6	千代藤土井	A	A+++	D	A+	A++	A++

北部農業技術センター提供 (育種価評価は平成29年7月現在)

分娩時の事故回避について

繁殖農家にとって子牛は生産物（商品）であり、子牛を健康に育てることが、繁殖経営を考える上で最も重要な要素といえます。健康に子牛を育てる第一歩として、安全に子牛を産ませることが大切になります。

難産時の分娩や、寒冷期の自然分娩による出生子牛の凍死など、人が出産に立ち会うことで分娩時の事故を回避できるケースが多くあります。このためには、分娩徴候を観察して分娩開始を予測し、適切な対応をとる必要があります。

(1) 分娩日予測と分娩徴候のあれこれ（確認です）

分娩予定日は、種付した月から3を引き、種付した日に10を足す事で計算できます（妊娠期間は約285日）。しかし、あくまでも目安です。分娩予定日の10日前には、分娩房に移し、分娩の徴候を観察しましょう。

〔観察からわかる、分娩数日前の徴候〕

分娩が近づくと、主に以下4つの徴候がみられるようになります。

- ①尾根部の両側がくぼむ
- ②外陰部が腫大し、粘液が垂れ下がる
- ③ふん尿の排泄が、一回の量が減り、回数が多くなる
- ④乳房が張る

このような徴候は、牛の個体ごとに様々ではありますが、分娩が近づくと、落ち着きがなくなったり、採食・反芻・休息のリズムが不規則になることから、行動の変化についても気を付けましょう。

(2) 分娩予測のための体温測定

分娩が始まる約1日前に母牛の体温が約0.5~1.0℃下がることが分かっています。そこで分娩予測の方法として、分娩予定日の7日ぐらい前から飼料給与前の体温（直腸温度）を測定、記録することをおすすめします。

では、「体温が下がる」とは、具体的にどのような状況なのでしょう。体温の測定方法と体温変化の状況からの判断をどのようにすればよいか説明します。

朝夕の2回給与を行う場合、牛の一日の体温変化は、朝の給与後夕方にかけて上昇し、夕方の給与で若干上昇してから朝方にかけて低下する形になります。平時であれば、このような一日のリズムが繰り返されます（図1の実線）。

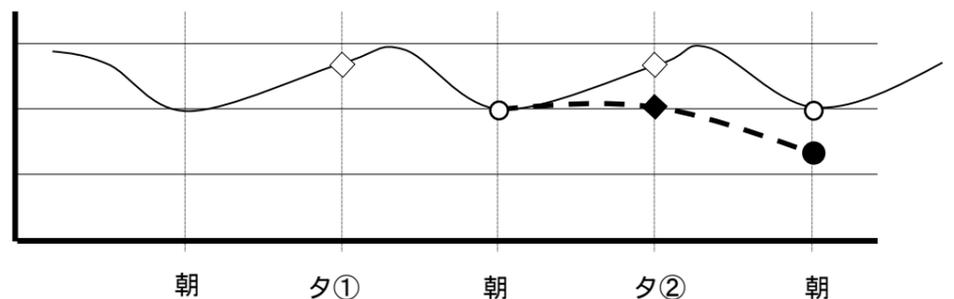


図1 牛の体温変化

しかし、分娩前にはこのリズムが崩れ、採食後の体温上昇がほとんどみられなくなります（図1の破線）。このような体温変化から分娩予測を行います。夕方の測定値が前日と大きく変わらなければ、24時間以内の分娩はないと判断できます（図2の実線）。夕方の体温が、前日の夕方の体温より下がっている場合、分娩が近いことを示しています（図2の破線）。

ただし、体温変化には個体差があり、必ずしも同じパターンを示すとは限りません。そこで分娩時の事故を回避するため、昼間分娩を促す技術と、分娩を告知するシステムを紹介します。

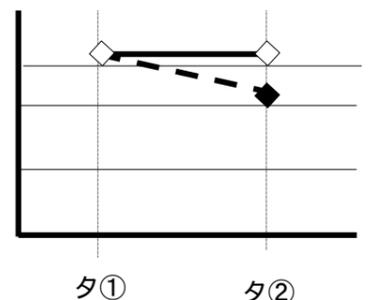


図2 夕方の測定値

(3) 分娩を昼間にコントロールする技術

分娩予定日の2週間前から、飼料給与を夕方から夜間（16時以降）の1日1回とし、翌朝に残飼があれば取り除きます。こうすることで、高い確率で昼間に分娩させることができます。

(4) 携帯電話、スマートフォンを活用した通報システム

牛の飼養管理は、こまめな観察が基本ですが、このような情報通信技術を活用したシステムは、実用段階に入っています。分娩前に現れる徴候をセンサーが感知し、畜主にメールで通報するシステムや、遠隔監視カメラがあります。商品やシステム内容、価格については、各メーカーにお問い合わせ下さい。

近年、和子牛の市場価格が高騰しており、分娩時の事故による損失は、経営に大きなダメージとなります。「見守れば救えたであろう」分娩事故の回避に努めましょう。